氏名（本籍）	中村　匡宏（鹿児島県）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	乙第４号
学位授与年月日	平成２９年３月１８日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項
学位論文題目	声の記譜法とその作曲技法における問題と可能性 ―「劇音楽スコアDRAMA－MUSICAL SCORE」の制作を巡って―

学位論文等審査委員

（総合審査）	委員長	准教授	沼口　隆	
		教授	藤井　喬梓	
		教授	森垣　桂一	
		教授	友利　修	
		教授	横井　雅子	
		教授	吉成　順	
（演奏審査）	委員長	准教授	沼口　隆	
		教授	藤井　喬梓	
		教授	森垣　桂一	
		准教授	今村　央子	
			松平　頼暁	（立教大学名誉教授、国際現代音楽協会(ISCM)名誉会員）
（論文審査）	委員長	准教授	沼口　隆	
		教授	友利　修	
		教授	横井　雅子	
		教授	吉成　順	
			水野　みか子	（名古屋市立大学教授）

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は 2017 年２月 17 日、申請者　中村匡宏の学位審査修了作品発表会ならびに学位申請論文に関して、厳正な審査を行った。以下に、１．演奏審査、２．論文審査、３．総合審査、に関する所見を記す。

全体の前提として、申請者が論文において「劇音楽スコア DMS（Drama-Musical Score)」という新たな記譜法を提唱していること、創作作品もこの記譜法の使用と密接に結びついていること、したがって論文と創作の間に通常よりも強い相関関係があることを付記しておく。

１．演奏審査

演奏においては、順に《NVC non verbal communication》より no.1、no.3、オペラ《箱男》より「書いているぼくと書かれているぼくの不機嫌な関係をめぐって」が発表された。プログラム冊子には、さらに《NVC non verbal communication》より no.2 と no.4 の解説も記載された。

いずれの作品も、日本語による舞台・声楽作品として創作と演奏へのアプローチに斬新さがあり、作品として高い価値が認められた。演奏された作品を成立順にすると、第２曲、第１曲、

第３曲となるが、その間での変化・進歩も評価された。
DMS については、確立されたばかりの記譜法であり、その是非を問うのは時期尚早である。今後のいっそうの洗練が期待される。

２．論文審査
学位申請論文は、主題「声の記譜法とその作曲技法における問題と可能性」、副題「『劇音楽スコア DRAMA - MUSICAL SCORE』の制作を巡って」であった。
キア・イーラムの「劇構造学スコア」に着目し、その応用によって DMS を考案した点は、視野の広さと独創性の両面から高い評価に値する。また、DMS が単なる創作の手段としてのみならず演奏分析においても有用であることが、リゲティやラッヘンマンなどの作品を通じて具体的に示されている点でも価値は大きい。
他方で、DMS の実用性・汎用性については、さらに踏み込んだ考察の余地もある。新たな記譜法の考案と同時に、幅広い視点を包含することを要求するのは酷だとしても、演奏家の自由を妨げる可能性、舞台装置や衣装等との関係性、西洋音楽以外への応用への可能性などにも視野を広げてゆくことが今後の課題となろう。

３．総合審査
DMS を確立した意欲、またそれに基づいた作品の独創性は、高い評価に値する。論文においては、みずからの創作に根ざした問題意識が前提になっているにも拘わらず、自作の解説となることを周到に回避し、客観的な論証を心懸けた点も特筆される。DMS については、みずからの創作を通してその有用性をさらに示してゆくことが課題となろうし、論文の記述に関しては、さらなる修練が望まれる。こうした状況の全般を審査し、社会において自立した演奏家としてみとめられるとの総合的な評価のもと、「博士（音楽）」Doctor of Musical Arts の学位を授与するに相応しいものと判定する。